
GTA主人公が幻想入り

Jason

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G T A 主人公が幻想入り

【Nコード】

N 5 2 2 5 Z

【作者名】

J a s o n

【あらすじ】

G T A L C S の主人公であるトニーシプリアーニが幻想入りし、数々の依頼をこなして、様々な事件に遭遇する物語です。
G T A なので残酷なシーンが含まれます。

初投稿なので言い回しや文の構成がおかしかったりします。

Liberty city

リバティーシティー アメリカ最悪の街。

全体的に治安が悪く、凶悪犯罪が多発しており政治腐敗に麻薬売買、労働組合のストライキ

そして何よりも移民の人種ごとによる犯罪組織の抗争が激しく、それらを踏まえ“全米で最も成功できない都市”に八回も受賞するという不名誉な記録を持つ都市である

このリバティーシティーでも最も有力なマフィア「レオーネファミリー」の小飼いであるトニー？シプリアーニは人生で一度や二度しかないような不思議な現実に困惑してた。

さつきまで車窓から見えた建物が連なる景色から、深い木々が深く生い茂る景色に一変したのである。

主人公

トニーシプリアーニ

フルネームはアントニオ？シプリアーニ

リバティーシティーでも有力なマフィア「レオーネファミリー」に所属している。

極度のマザコンであり、母親のいうことは何でもする。

また、ファミリーの為ならどんな犯罪でもためらわないでやるが、それさえ除けば一般常識はある様。

ある「大物」を殺して一旦リバティーシティーを離れていたが、ほとぼりが冷めて帰ってきた。

本作の設定ではまだ下っ端扱いのままのチンピラ

性格は気が短く暴力的である。

主人公（後書き）

ただの主人公説明です…

幻想入り

リバティーシティーには三つの島がある。

「ポートランド」「ストートン島」「シヨアサイド？ベイル」

そのうちの工場地区のポートランドのセントマークス付近で、レオーネの特徴的な車

レオーネセンチネルを走らせていた。

レッドライト地区を縄張りとしている、シンダコファミリーを一掃した後だった。

シンダコは前まではレオーネの傘下にいたが、このごろになって激しく対立し、ここ数日には頻繁に銃声が鳴り響いている。

シンダコだけでなく中華街を拠点とするトライアド、ヒスパニック系ギャングのディアブロにも警戒しなければならない。

いずれにしても、近い内に対立するだろう…

そう思えてきたら腹がすいてきた。

そういえば今日はママのレストランで食事だったな…

ならば車を飛ばさないと トニーはアクセスを踏みこんだ。

万が一遅れたら何を言い出すかわからないからなあ トニーは苦笑いを浮かべる

センチネルにはどこにいても敵対ギャングに対応できるよう、銃器や手榴弾、火炎瓶、バットまである。

レオーネのボス「サルバトーレ」宅近くで車を飛ばし、信号無視を

しようとしたとき、10メートル先に妙な切れ目ができた。
その切れ目がまた不思議で、空間を切り裂いてできてるよう

シンダコが新しい兵器を輸入あるいは、どっかの兵器生産工場から
パクッてきたのか？

しかもレオーネのドンの家近くである

「冗談じゃねえ」

俺はその得体の知れないものを車と一緒に突っ込んで処理するとい
う、自らを巻き込んでボスの安全を確保するという荒業にかけた

そして爆発による衝撃に備え、ハンドルに頭を突きつけ、脳みそは
ママだけのことでパンクしそうな時、突如それは起こった。

車ごとその切れ目に入っていったのだ。

勿論、トニーはそんなことを知らず頭をハンドルに預けたままその
不可思議な空間にセンチネルと共に、紫色の奥深くに行ってしまった。
た。

その次の日にそれらを一部始終見ていた一般人が、その全てをリ
バティー市警に話し、麻薬中毒者による幻覚と判断され、警棒でボ
コボコにされた挙げ句、署に引っ張られたのは言うまでもない、

幻想入り（後書き）

改めて見ていたが、文が酷い????

まあそれは置いときご感想をお待ちします。

どんな批判でも結構です。

ただ、ここをこうした方がいいとか訂正を言ってくださったならおさら嬉しいです…

紫の憂鬱

八雲紫は落胆していた。あまりのショックに毎日自分の式が作る朝食に手をつけられなかったほどである。

主人の異変に気がついた八雲紫の式である八雲藍はこの重たい空気を破ろうと原因を聞いてみたが、はっきりとした答えが返って来ない。

ただ重苦しい雰囲気がある。その場を支配していた…

八雲紫には能力がある。「境界を操る程度の能力」

境界と名の付くものなら何でも支配下におけることができる。いわゆるよくいわれるチート能力である。

また彼女はその能力を使い、外の世界に行くこともしばしば。

事の発端はここから生まれたのである。

外の世界（人間達）はいつ見ても新鮮だ。

身体能力は到底妖怪に勝ち目はないが、彼らは驚くべき頭脳を持つ

ている。

そこから派生し、科学力が進歩、そして今に至る。

紫は外の世界のことはある程度把握している。

だから今度も自ら能力の使い、空間の境界を操り外の世界を鑑賞しようとした。

だが、彼女が“アメリカ最悪の街”にスキマが繋がるとは思っ
てみ
な
か
っ
た
…

リバティーシティーは「全米で最も成功できない都市」といわ
れ
て
い
る。

また“最も盗難？強盗被害に遭遇しそうな”都市であり、“最も環
境汚染による病気で死亡しそうな”都市であり、“最もアルコール
？麻薬中毒になりそう”で、何よりも“マフィアの銃撃戦の流れ弾
に当たそう”な都市であると認識されている。

スキマからリバティーシティーを覗いた感想は“空気がかなり汚
れており”なによりも驚くべきことは、治安の悪さ

街中に響く銃声、それに逃げまとう人々、
交通事故、まさに生き地獄である。

しかしながら紫の目には失望感ではなく、だんだんこの街に対し
興味を持つようになった。

彼女が今まで見てきた外の世界は全て治安が良く、平和そのもの
だった。

それらと連動し、対比することによって、なおさら興味が湧いてきた。

車が通る道路に5？くらいのスキマを開けて、車が目の前にスレスレにくるスリル感を味わうという、子供が喜ぶような遊びをしていたことが間違だった。

遊びが全盛期をむかえた刹那起こった。

焦げ茶色の服を着た男達3名くらいが、紫の近くにいた全身黒づくめの男達にいきなり発砲したのだ。

その場は一変し、銃声が轟く銃撃戦に成り変わる。

さつきまで普通に歩いていた住民達は先を競って逃走し、中には車を乗り捨てる人間もいた。

「嫌な場所に出くわしちゃったわね」

独り言を呟きその場を逃れる為、早々とスキマを閉じようとした。

だか肝心の腕が動かない 拳がらない

おかしいと思いながら、自分の腕を見て驚愕してしまった。

おびただしい量の血が服を染み込み、細長い腕を伝い、足下に垂れていたのである。

気づいた時は腕に激痛が襲ってきた。 多分、今繰り広げられてる銃撃戦に巻き込まれ、流れ弾に当たったのだらう。

咄嗟の出来事だったので、頭がうまく回転しない。 でも傷の深さぐらい見ておくべきかしら？ スキマの中は暗くわかりにくい。 彼女は明るさを求め、スキマを大きく開けた。

瞬間の判断かあるいは咄嗟の出来事に興奮してたのか、スキマを2メートルくらい大幅に広げてしまったのである。

彼女はあわてて縮小しようとした。

だか一台の車が物凄い勢いで此方に向かってくるではないか！
まるで此方に突っ込んでくるように。

結果、紫色の薄気味悪い空間に黒い車が入りこみ、紫の闇へと消えていった。

紫の憂鬱（後書き）

表現力が
：

これは酷い作品になりそうだ

どうでもいい作者の好きなLCSキャラランキング

1位 トニーシプリアーニ

まあ、好きじゃなかったらこの作品は成立しない

2位 ドナルド？ラブ

え？変態だつて？ いや、キャラ濃くていいジャン

3位 ミッキー？ハムフィスツ

よく見るとイケメン

戸惑い

故意にやったわけではない。しかし、外来人の無駄な幻想入りは時には幻想郷の危機を意味したりする
：

周りの空間に目がついている。おかしい奴だと思われるかもしれないが、ギョロギョロした無数の目に見られると、今の自分の現状を理解しざるを得ない。

人が死ぬところなるのか。 トニーはママとボスのことで、頭も心も支配されていた。

薄気味悪い空間から一変し、辺りは木々が生い茂る南米のジャングルを連想させられる場所にでた。しかしスピードをだしていたので、派手に突っ込み、しかも着地地点が岩が露出している足場の悪い場所だったので、お気に入りセンチネルが鈍い音を盛大にだした。

「ガッシャヤヤーン」

俺はフロントガラスに向かって盛大に頭を打ちつけられた。

ひとまず周りを見渡してみる。 歩行者の話し声さえ聞かれない。車のクラクション音やトニーには日常茶飯事の銃撃戦による銃声も聞こえない。 トニーは困惑した。

おいおい、リバティーシティーにこんなでけえ公園あったけ？
サルバトーレ宅は確かに少し森林ぽかったけどよ。

トニーは知らなかった。 100メートル先には外来人を主食とする妖怪がいたことを……

戸惑い（後書き）

短いなあ…

ご感想をお待ちします。アイデア提供でも構いません。基本的にゲームみたいな流れにしたいですね。

遭遇（前書き）

駄文はしょうがない
せめて完結は目指そう

遭遇

外の人間は弱虫である。これはここの妖怪達の常識である。普通妖怪は人間を食する。ときどき人里を襲うが後に、村で最も信頼される人物「上白沢慧音」に返り討ちにあうだけである。

また村人にも自衛団など弱小ながら、妖怪に対抗する組織があるので、同時に相手をするのは無理がある。

外来人はまた、ここの妖怪達にとって笑いの的である。少なくとも村人達の方が勇気があるといっても過言ではないだろう。

彼らは俺達妖怪を目の当たりにするとき、足が震えそのまま座り込み、奇声をあげるのである。

逃げることもしなければ反抗さえないのである。

そのような惨めな姿が人間は妖怪に及ばないことを強く思わせるのだった。

外来人は1ヶ月に一人ぐらいしか来ない。

つまりとても貴重な存在であり、また他の奴らに先を越されるわけにはいけないのである。ついさっき匂いで見つけた獲物を逃すわけにはいけない。また、あの恐怖の顔を見れると思うと、だんだんと疾風の如く獲物に向かっていった。

トニーは車から降り、ピストルを片手にポケットに手榴弾をいれ辺りを見回した。

当然、こんな場所は見覚えはない。もしかしたら、あの意味不明の空間の切れ目はサルバトーレがマリアにプレゼントした植物園の入り口なのか？ そんなくだらんことを考えたりした。しかし、空気が綺麗だ。

まるで別世界にいるようだ。

こんな場所じゃオオカミやら熊やら何がでてもおかしくないな。
オオカミ？……

リバティーシティーのマフィア、ギャング達はいつどこで殺されるかわからない。

その為か第五感が鍛えられる。背中に冷や汗が垂れたのと同時に、トニーは横に体を勢いよく投げた。それと同時に今までいた場所に全身黒色の赤目のデカイオオカミモドキが入れ替わるように着地した。

「おい、何なんだよ」 冗談じゃない

ここはリバティーシティーだろ？ あんなもんどつからみても怪物かそれとも生物兵器じゃねえか。

外人だと思っておちよくつてたら油断していた。あの野郎は避けやがった。今度ばかりは今までの獲物とは違うかもしれない。まあいい 人間風情がどの程度俺様を楽しませてくれるのかな？ 彼は驚愕する人間に再度飛びかかった。

遭遇（後書き）

平日は更新が遅れます。

妖怪

変な切れ目に突っ込むは未開の地にでるわ、オオカミモドキに襲われるし散々だ。

しかもどうもこいつは知能が高いらしく、

「ちえ」や「クソ野郎」等々人間の言語を喋るのだ。殺す気満々である。このままでは俺が屍になるのも時間の問題だ。殺すしかない。

mission

「妖怪を殺せ」

トニーはポケットから手榴弾をとりだす。一個しかない今有効に使わなくてはならない。あのオオカミ野郎は動きが早い。ならば動きを封じ込めばいい。じゃあ奴の気を引かなければ…

この外来人はこんな事は日常茶飯事かのように、俺様の攻撃を交わす。

俺はいつも通りにいかない狩りに腹が立ち遂に奴に真っ正面から突進した。

これはチャンス トニーはピンを抜き思いつき手榴弾を投げた。オオカミには当たらなかったものの、奴の後ろで、大きな轟音とともに爆発した。

奴は手榴弾自体を知らないせいか大音量に驚き、呆氣にとらえ後ろを振り返る。

俺はその無防備に晒しだされた背中に向かって、ピストルで何十発もの弾を打ち込んだ。

血飛沫が舞う。

弾丸をともに受け最初は立ち上がろうと必死にもがいていたが、もう一発頭にお見舞いしてやると無残にその場に倒れ込んだ。

t e d

m i s s i o n c o m p l e

改めてこいつを見える。明らかにオオカミではない。じゃあ何なんだ一体？
まず、人を探さないと…

「人里へ向かえ」

今日の報酬100\$

妖怪（後書き）

戦闘描写は難しい…

人里

道が悪く車がガタガタ音をたてる。何がなんだかわからない。そもそもここはリバイティーシティーであるかどうかも怪しい。この気味悪い場所から早く抜けないと。

トニーは思いっきりアクセルを踏み込んだ。

木々が生い茂る薄暗い視界から畑と同時に農家なのだろうか？木でできたほったて小屋がポツリポツリと、少数ながら見えてきた。さらに車を飛ばすと人の姿を確認できた。

しかし、何とも妙。こいつらはホームレスより惨めで質素な格好をしている。

トニーは車をさらに加速させ、集落らしき場所へと向かっていった。

妖怪達は仲間の死体の周りに囲むようにして見下ろしていた。背中から首にかけて何かに貫通した跡がある。

「こいつは一年前のあのときと一緒だ。人間の仕業に違いねえ」

「人間風情が…村は皆殺しにしてやる」

「だけどうすんだ？ 上白沢慧音がいる限り俺達に勝ち目なんかねえぞ？」

「そこは心配ねえ ガキの一人や2人を人質にすればお手のもんさ。」

「ぎゃはははは それは名案だな」

「おい何だあれ」 「外人か？」

こいつらは車を知らないのか、こつちを指差して何やら喚いている。 おいおいとんだ田舎に来たみたいだぜ。

あまりにもやかましかったからクラクション音を盛大に鳴らした。
するとどうだろう

泣き叫ぶ者、気絶する者、大混乱に陥った。

俺は車から降り辺りを見回した。

まあ、随分とふざけた村だ。家はボロの一言に尽き、ビルは勿論電柱さえ見つからない。

俺はイラついた。

すると一人の若い女性が此方に向かってくる。はて、ここのもめ役か？ならば話が早い。

「おい、ここはどこなんだ？ホームレスをこんなに集めて何やってんだ？」

すると満足した答えは返らず、代わりにふざけた返事が返ってきた。
「その言動を察するにどうやら外人だな。」

「外人？」

「つまり別世界だ。」

人里（後書き）

東方キャラの喋り口調がわからん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225z/>

GTA主人公が幻想入り

2011年12月20日17時54分発行